

着花過多樹の小玉化防止と隔年結果防止

最近10年間で愛媛県の温州みかんは生産量が急激に減少しているが、そのなかで隔年結果性も増大傾向にある。今年は昨年よりばつの影響で温州みかんの着花量は著しく多く、しかも発芽は特に南予地域では昨年よりも2週間ほど早い。

着花量が多いと、新葉が少なく来年の結果母枝になる春梢も減少する。また多量の着花によって養分が消耗し、細胞分裂が盛んな子房間で養分競合も熾烈となる。さらに発芽が早いと、図に示すように果実の肥大力が小さく、小玉になりやすい。このままでいくと今年是小玉果が多くなり、さらに来年は裏年になることがほぼ確実である。

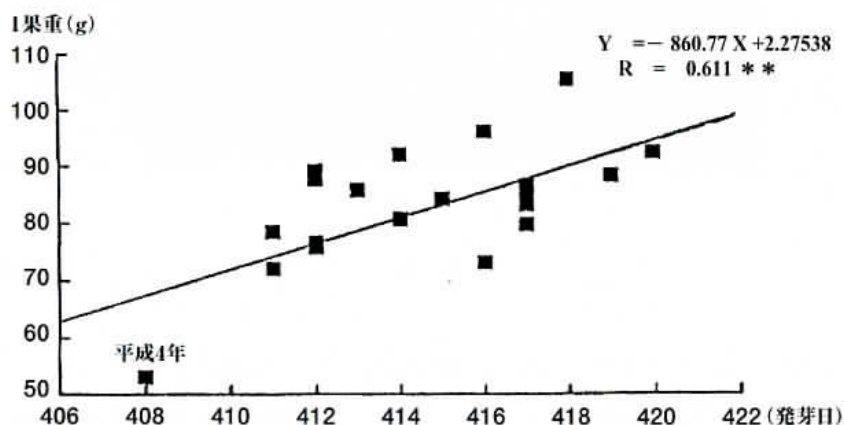


図 早生温州における昭和51年～平成7年の21年間における発芽日と9月10日の1果重との相関（愛媛果試 伊台）

表 花肥の施用時期と結実及び肥大促進（1982）（愛媛果試）

処 理 区	葉数	花数	結 実 数		結果率 %	1 果 平均重* (g)
			有葉花	直 花		
尿 素 散 布	400	189	22	21	22.8	0.41
硫安（4月20日）	341	147	15	21	24.5	0.59
硫安（5月8日）	329	163	9	7	9.8	0.38
対 照	418	174	9	8	9.8	0.16

注) *開花1ヵ月後の乾燥重

対 策

(1) 摘蕾と後期予備枝せん定

着花過多樹は樹冠外周の直径0.5～1cm、長さ20～30cmの側枝を単位として、蕾をちぎって落とすか着花過多の1年枝をせん定して、側枝全体を無着花の予備枝にする。

樹冠内や裾の弱小1年枝の花は小玉になるので、摘花の代わりに切り返しせん定して着花量を減らす。なお着花過多樹の摘果は、より一層早めに枝別強摘果する。

(2) 液肥、花肥、夏肥

子房の肥大促進と新葉の緑化促進及び後期予備枝からの新梢発生促進のために、開花期と緑化期に窒素主体に肥料を効かす。表に示すように、花肥は4月中下旬に10a当たり窒素で5～6kgを施用する。液肥は尿素300倍

程度で開花期から開花2週間後に葉面散布する。

旧葉の落葉防止のためには、6月上旬に速効性肥料を窒素で10a当たり6～7kgを施用する。夏肥を施用しない場合には6月下旬頃に窒素あるいは3要素液肥を葉面散布する。夏肥は隔年結果防止に効果が高い。

（南予分場：

分場長 高木 信雄）